

M-GTA 研究会 Newsletter no. 9

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（自治医科大学看護学部水戸研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：岡田加奈子、小倉啓子、小嶋章吾、斉藤清二、佐川佳南枝、林葉子、水戸美津子、福島哲夫、坂本智代枝、木下康仁

第 31 回 研究会の報告

【日時】 2005 年 5 月 28 日(土) 13:00~18:00

【場所】 立教大学（池袋）10 号館 2 階 x203 教室

【参加者（敬称略）】

水戸美津子（自治医科大学）、小倉啓子（ヤマザキ動物看護短大）、林葉子（日本医療機能評価機構）、佐川佳南枝（西川病院）、岡田加奈子（千葉大学）、小嶋章吾（国際医療福祉大学）、塩塚優子（青梅慶友病院）、林裕栄（埼玉県立大学）、松井由美（大正大学大学院）、徳永あかね（神田外語大）、堀内みね子（神田外語大）、村上律子（神田外語大）、北岡英子（神奈川県立保健福祉大学）、山崎浩司（京都大学大学院）、真砂照美（広島国際大学）、古屋昌美（山梨県立看護大学大学院）、市江和子（日本赤十字豊田看護大学）、新鞍真理子（富山医科薬科大学）、大島寛子（山梨県立看護大学大学院）、福島円（日本女子大学大学院）、堀越敦子（神奈川県立保健福祉大学、ヒューマンサービス研究会）、松戸宏予（筑波大学大学院）、長住達樹（国際医療福祉大学）、鈴木直樹（埼玉大学教育学部）、山崎早苗（前橋医療福祉専門学校）、江原美登理（東京都立田柄高校）、鹿野裕美（仙台市立松陵中学校）、西能代（千葉大学）、荒井きよみ（千葉大学）、倉鋪桂子（鳥取大学）、升井恵美（専修大学大学院）、都丸けい子（筑波大学大学院）、大橋達子（富山医科薬科大学）、樋口香織（名古屋大学医学部保健学科）、黒岩靖子（佛教大学）、宗村弥生（東京女子医大看護学部）、掛本知里（東京女子医大看護学部）、大西潤子（日赤看護大学）、小林治子（龍谷大学大学院）、平山恵美子（飯田女子短期大学看護学科）、小野美喜（大分県立看護科学大学）、藤内美保（大分県立看護科学大学）、石田多枝子（海老名市青少年相談センター）、小薬理絵（神奈川県スクールカウンセラー）、松尾淳子（聖徳大学）、渡辺千枝子（松本短期大学）、田尻明美（目白大学大学院）、中村亜津沙（目白大学大学院）、松本賀都子（武蔵野大学）、木下康仁（立教大学）の計 50 名（…記入漏れ等はお知らせください）

【総会報告】

別紙添付

【研究報告 1】

「体育における運動の意味生成過程に関する研究」

鈴木直樹（埼玉大学教育学部保健体育講座）

1. 発表の要旨

学校体育では、運動に関わる「技術」や「知識」を学習内容とし、その定着を目指した学習指導の実践が一般的である。これは、体育授業において学習内容があらかじめ設定されていて、それを定着させるために、伝達型の授業を行う実体論的な学習観に基づく学習指導である。ところが、このような学習にあっては、運動技能の優劣によって序列化がなされ、達成・向上することに運動する価値を与えている。これは、欠乏動機に基づく学習であり、達成指向ばかりが助長されることで、運動を好んで行うものとそうでないものの二極化現象を拡大する結果を引き起こす一要因ともなっている。近年、このような反省から関係論に立脚した学習観のもとに体育の学習が主張されるようになったが、その実践はわかりにくく、実践化が難しいものとなっている。その原因の一つには、運動に関わる学習形成プロセスやその構造の曖昧さが大きな原因の一つとなっていると考えられる。それは、体育の場における「かかわり合い」によって成立した学習が、「今—ここ」にあるものであり、それは絶えず変化を繰り返しているからである。当然のことながら、そこにある学習内容は、「かかわり合い」そのものであり、それは子どもの学習の「かたち」ともいえるものである。そこで、「かかわり合い」は、授業において教育的関係を基本としながら、「人・モノ・こと」の“あいだ”で相互に働きあっているものといえる。このように、学習を実体的なものにとらえるのではなく、関係の中で学習の意味や構造が変化するととらえる学習をここでは、「関係論的学習」と定義することにする。ところで、鈴木（2003）はこのような関係論に立脚した体育の学習における評価では、コミュニケーションに学習評価を考える必要があることを示唆し、このような評価を「学習評価としてのコミュニケーション」と定義した。ここでは、関係論的な学習と学習評価に関わる研究を概観し、新たな概念を提示するに留まっていた。そこで、本研究では、関係論的な学習における「学習評価としてのコミュニケーション」が授業において学習にどのように影響をし、どのように位置づけるかを明らかにし、「学習評価としてのコミュニケーション」を学習指導で実践する手がかりを提示することを目的としている。

＜分析テーマへの絞込み＞

- ①明らかにしたいプロセス：授業における教師と子ども間の関係性の変容において、学習として現象化される行為を意味づける運動への意識が「運動の意味」として生成され、変化していくプロセス。
- ②分析テーマ： 「体育における関係性の変容に伴う運動の意味生成プロセス」
- ③焦点化するもの： ・ 「自己—他者—モノ」との「かかわり合い」の変化プロセス
 - ・ 「運動の意味」を生成し、運動をすることへ高い意欲を持った子どもとそれを支援した教師との相互作用プロセス。
 - ・ 「運動の意味」を生成し、運動をすることへ高い意欲を持った子どもとそれを支援した子どもたちとの相互作用プロセス。

＜データの収集法と範囲＞

- ① 対象：N 小学校 2 年生児童男女 19 名
- ② 調査期間：平成 16 年 10 月～平成 17 年 3 月
- ③ 児童には、授業前にインタビュー（半構造化面接）を行う。その後、インタビューをした児童を中心に授業中に参与観察を行い、さらに、授業後、インタビューを行う。授業者については、授業後にインタビューを行う。したがって、本研究では、インタビューで得た情報と参与観察によって得た情報を対象として分析を進める。

今回の発表では特に、収集されたデータをもとに生成した概念について発表し、意見を求めた。また、概念からカテゴリーを生成し、結果図を作成したものを発表した。

2. 質疑・意見要約

- ・ データ収集時期に問題はないのか？授業開始前と授業開始後にとったデータから意味生成プロセスを明らかにするのか？
- A：本研究では、時間を追うごとに子どもの運動の意味がどのように変化するかということの問題にしているわけではない。子どもが学んでいる現象において運動の意味がどのように立ち現れているのかという事実から、運動の意味生成プロセスを解明しようというものである。そういった意味では、データ収集時期はあまり問題にならない。
- ・ 現在作成されている概念が子どもの観点から作成されていないものがある。
- A：子どもの側と分析者の両方の視点から生成されたものが混在しているので整理をします。
- ・ 「体育」と「運動」がワークシートの中で、ごちゃごちゃになっている。分けて捉えた方がよいのではないかな？
 - ・ データは「分析テーマ」と「焦点化」の 2 点から解釈をしてよい。
 - ・ 結果図が説得力がない。概念を生成していくプロセスの中で、概念を関連付けながら結果図を生成していく。

3. 感想

研究発表という貴重な機会を与えて頂きありがとうございました。今回の発表を通して、質問や意見を頂く中で M-GTA についての理解が深まってきたように思います。特に、概念の生成方法や結果図の作成についてこれまで悩んでいたことを解決する手がかりを頂いたように思います。これまでは、膨大なデータを前に躊躇している自分でしたが、今はそのデータに歩み寄ろうとする自分があります。これも、研究発表を通して、あるモノを媒介にして、協働して研究にアプローチができた結果であるように感じてお

ります。本当に今回、発表させて頂いたことに感謝しております。今後は、今回の発表を踏まえ、まだ解釈し切れていないデータの解釈を行い、概念生成を進めるとともに、結果図の精緻化を行っていきたいと思います。できれば、次回にはストーリーラインまで明確にして発表できればと考えています。この研究は博士論文の一部でもあるので、7月には論文にまとめて投稿できるようにしていきたいと思います。たくさんのご意見ありがとうございました。今後ともご指導よろしくお願い致します。

【研究報告 2】

「健康増進事業における理学療法士の役割」

国際医療福祉大学 リハビリテーション学部 理学療法学科 長住 達樹

1. 発表の要旨

- 1) M-GTA に適した研究か：保健学・地域理学療法学領域における研究であり、健康問題や生活問題を抱えた人々に専門的に援助を提供するヒューマンサービス領域である。健康教室参加による疼痛軽減や健康意識向上、さらに生活改善へのプロセス的性格をもっている。
- 2) 研究テーマ：健康教室参加を契機とした参加者の疼痛軽減や健康意識向上、さらに生活改善に向かうプロセスを M-GTA により分析し、高齢者健康教室の効果的な方法について検討する。
- 3) 現象特性：PT からの生活指導を受けた健康教室参加者が、健康体操などの習慣化を通して、疼痛軽減とともに生活改善と健康意識向上に至るプロセス。
- 4) 分析テーマへの絞込み：健康教室に参加した高齢者の ADL 改善プロセスに限定。
- 5) データの収集法と範囲：健康教室に参加したことがある高齢者に対して、記名式アンケートを実施した。アンケート結果より、改善傾向を示す高配点者の上位 20%かつ参加率 60%以上の「生活が改善した」と判断された、参加者 6 名（平均年齢：75.2±6.8 歳）に限定した。
- 6) 分析焦点者の設定：疼痛が軽減して ADL が改善した参加者。
- 7) カテゴリーの生成：18 の概念から 6 つのカテゴリーを生成した。
- 8) ストーリーライン：参加者は、日々の活動を消極的にする【疼痛による ADL 制限】とともに、日常生活の中で感じている記名力低下、難聴傾向、疲労感、柔軟性の低下などの【加齢にともなう虚弱感】を老化現象として感じていた。そのような参加者達は、一方で、老いた親の世話などの経験が教訓となり、【人に迷惑をかけないための健康管理意識】が強く、実子夫婦には同じような迷惑をかけられないと感じていた。その結果として、自己の健康管理に対する意識が高く、健康に関するさまざまな情報を、自己流にアレンジしながら健康管理

に役立てている【健康の秘訣】を持っていた。また、参加者は【家庭内の役割意識】も強く、洗濯や食事準備、さらに育児などの家庭内の役割分担を持っていないながらも、前向きに取り組む姿勢がうかがえた。このような考え方や行動は、【自己流の健康管理】として参加者自身の精神的な安定を図り、健康を維持する秘訣を持っていた。このように、常に【ポジティブな気持ち】で生活を営む参加者は、他者の言動や行動に対して落胆しながらも、それらを良い方向に解釈する思考過程を持っていた。したがって、【対人交流を好む意識】も強く、自発的に多様な人々との交流機会を図りながら健康教室へ参加するようになった。健康教室では、「健康教室の改善感覚」として、【疼痛軽減感】や、健康教室参加や体操の実践により、筋疲労の緩和や疼痛軽減などの【運動による改善感】が得られた。さらに、他者の経験などを参考にしながら健康不安を払拭する【対人交流による健康感】なども得ながら、参加者は、健康教室に対して、【参加した実感】を高めていった。同時に、参加者は、近隣との交流などの目的をもった【日課の散歩と楽しみ】を持っており、健康維持の一つの手段として捉えていた。さらに、家庭内役割のある参加者は、洗濯や掃除などの家事を、【運動としての生活活動（家事）】として捉えていた。一方で、【趣味活動の楽しみ】や、孫と遊ぶ、お酒を嗜むなどの【その他の楽しみ】が、参加者のエンパワーメント向上に働きかけ、日常的な習慣が運動習慣の獲得へと変化していった。このような【日課となった健康体操】は、自己の健康感を毎日感じ取る絶好の機会になり、結果的に、ADL改善とともに、余暇活動の拡大などのQOL向上につながった。

- 9) 方法論的限定の確認：本研究の結果は、健康教室に参加したことがある高齢者の中で、「生活が改善した（快適に楽になった）」と判断される参加者（生活改善群）に限定された範囲内にて得られた。
- 10) 論文執筆前の自己確認：＜この研究で何を明らかにしようとしたのか＞「改善群」における疼痛の変化と生活の改善に焦点をあて、疼痛軽減による日常生活の快適化に至るプロセスとQOL向上に向かうプロセスを明らかにしようとした。また、改善群は、介護予防の意識も高く、また健康への自己責任感も強いという健康意識が認められた。また、以前から続いている疼痛によるADL制限が、本人の介護予防意識をさらに向上させて、健康教室への参加に至る経緯があった。河野らの閉じこもりに関する質的研究では、人に迷惑をかけたくないという思いから、自分でするという自立心の強い者は、活動意欲があると述べている。今回の改善群も、このような意欲の高い参加者であったものと考えられた。さて、健康教室では、PTによる生活指導や運動指導などによりADLが向上し、参加効果の実感に結びついた事が分かった。また、活力面でも前向きな性格であることや、疼痛軽減が図られずにADLの制限をきたしていても、持ち前のクヨクヨしない性格で取

り組み続けるという前向きな特徴も明らかになった。河野らは、活動意欲の高い者は、元気になったらしたいことがある、自分らしく活動したい、家族と関わりたいなどの目標があると述べている。今回の改善群でも、本健康教室に参加することによって、「元気になったらしたい目標」に向けて参加継続したものと考えられた。また、参加交流による効果も大きいことより、全体として、活力向上およびQOL向上に向かっている事が考えられた。最後に、今回紹介しなかったが、改善群と非改善群の概念同士を比較すると、健康教室参加によって生じた健康感や改善感などの実感は、非改善群には現れておらず、改善群特有の概念であることがわかる。このような健康感や改善感などの実感を持つ事ができた背景を考察すると、改善群は、元々健康づくりの方法論を理解していなかった、もしくは理解していたが実践できなかったのではないかと考えられた。

2. 質疑応答とコメント

- 小倉先生より) 分析テーマが絞り込まれていない。基本的に1論文1分析テーマで進めていかなければ焦点が定まらない。但し、分析を進めていく中で、テーマの変更は可能である。→疼痛と生活改善, 生活の質の変化を同時に分析していた。生活改善プロセスというコア分析を通して、全体像をまとめていく必要があった。
- 水戸先生, 林先生より) 概念形成に至る過程で、バリエーションを単純に分類した様な印象を受ける。バリエーションの構成は良いが、概念名の生成がバリエーションから滲み出てきたものではない。バリエーションから訴えてくるような概念名を考えてみるとよい。→概念名の生成について参加者全員で考察する機会を得た。

3. 感想

今回は、研究発表の機会を頂きまして大変感謝しております。質疑では、水戸先生はじめM-GTAの先生方から、概念形成の考え方など、分析・解釈方法における最も重要な点を指摘されました。その他にも、さまざまなアドバイスを頂きました。この場をもって、深く感謝申し上げます。現在、木下先生の本を何度も何度も読み返しながら、概念生成やカテゴリー生成に至るポイントを再確認しております。今回の発表により、自己の未熟な点が明確になってきたと感じております。今後ともご指導・ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

~~~~~

### 【構想発表1】

接触場面のメール交換に見られる言語的調整行動の変容プロセス  
～日本語教授法の履修学生のケース

## 1. 発表要旨

外国人非母語話者と母語話者とがやり取りをする場面は社会言語学や言語習得の分野で「接触場面 (contact situation)」と呼ばれている。今回の研究は非母語話者である留学生と日本語母語話者である一般学生 (以下「学生」と) の接触場面である。学生が留学生に対してメールを書く際にどのような言語的な調整を行うかに焦点を当てて分析を試みる。なお、言語的調整とは接触場面等において相手が理解しやすいように言語面で調整を行う行動を指す。これまで対外国人に対する言語的な調整についてはフォリナー・トークとして分析されてきたが、その出現のメカニズムについては明らかにされていない。要因のひとつは実験的な状況で現象が現われにくいことも挙げられている。

発表者は留学生向けにコンピュータ操作等を教える科目を担当しており、その一環として行っているメーリングリストを使ったメール交換において学生が言語的調整を行っていた。これまではその調整の特徴を明らかにしてきたが、この中で学生達の調整の仕方やメールを書く際の調整に対する意識が変化する様子が見られた。そこで、今回はその調整の意識変化の過程に注目して、今現在留学生とのメール交換をしている学生を対象に新たなデータを収集し、分析したいと考えている。以前の調査において、「日本語教授法」を履修している学生にメール相手を依頼した場合とその他の学生に依頼した場合では、両者ともに調整の様子が見られるものの、前者のグループの方が調整に対する意識が強かった。そのため、学生のなかでも「日本語教授法の履修学生」を分析焦点者として設定することにした。

分析するデータの中心は、現在メール交換中の学生10名ほどであるが、それに先立ちこれまでのインタビューデータから概念抽出を試みた。現在のところ「正しい日本語使用」「既習語彙への配慮」「書き言葉使用」「漢字回避」「読点の頻用」「補足説明」「敬語・丁寧体の使用」「内容の省略、簡略化」「自経験投影」「主語省略の回避」が挙げられる (配布資料に分析シートの一部を掲載)。

## 2. 質疑応答

Q1: 配布資料では「4. 分析テーマへの絞込み」が書かれていない。

→ データを分析する過程で絞り込むのだと思っていたが、今日の研究発表のなかで分析テーマが変化しても良いことを知り、安心した。現在のところは「留学生に対するメール交換場面における日本語教授法の履修学生がどのような言語的調整をしているのかそのプロセス」。研究題目と同じものになる。

Q2: この研究の結果というものはどういうところに寄与していくのか。

→ 発表者のもともと興味は、接触場面においてどのような調整をすれば非母語話者

が理解しやすいのか、という点にある。調整すれば相手がわかるというものではない。例えば『一対一で話している時にはわかるのに3人になるともう話についていけなくなってただ笑ってわかるふりをしている』という（非母語話者からの）話を聞くことがある。これは母語話者の調整の仕方が途中で変わるからだと考える。その点を明らかにし、母語話者側の接触場面で気をつけるべきことを明らかにできると思う。ただ、これは明らかにした結果が明日すぐに役に立つという種類のものではない。その点で、M-GTA 手法が用いられるべき「ヒューマン・サービス領域」に入るのか自信がない。

<会場からの意見>

将来、日本語を教える立場に立つ学生には大切な意識。教授法にかかわってくる大事なものでこれはヒューマン・サービス領域に入るものだと思う。

Q3: 今回、調整に対して是か非のどちらの立場で分析しているのか。また、相互作用を見るのであれば、教授法学生だけでなく留学生側の視点も同時に分析していく必要があるのではないか。

→今回は、調整することが良いか悪いかというどちらか一方の立場に立って分析しない。

<会場からの意見>

コミュニケーションには相手の反応を見ながらというものが入っているので自ずと相互作用的なものが含まれる。M-GTA の基本では分析焦点者は1名。今回、分析焦点者が教授法履修学生のみであることに問題はない。

Q4: メール交換を選んだのはなぜか。

→ 話し言葉における調整ではデータ収集ができないため。今回、メールに同様の調整が見られたのでそれを分析することにした。

<その他のアドバイス>

- ★ 今回「7. 分析ワークシート」で挙げられている概念は、学生が教授法で学んできたものを発言したことをまとめている分類に過ぎない。なぜ、教授法に従って留学生にそのような表現を使って書いたのか、ということをインタビューで聞くことが大切。そこで相互作用が出てくる。その人が相手に対してどのように認識しているか、相手を思っただうしたかということをインタビューで明らかにしていく。例えば『なぜ留学生のためにこう書いたのか』など。何をテーマにして、ということがはっきりとしていけばインタビューでの聞き方も変わり、分析する内容も決まってくるのではないか。
- ★ 教授法を履修している場合、どの段階の学生なのかが問題となる。M-GTA で指摘されると想定される疑問について明らかにしておくこと。そして、どこを分析テーマにした



いのかははっきりとさせておくこと。

- ★ 手法はニュートラルなもので目的に合わせて M-GTA の手法を用いればよい。明らかにしたいことがはっきりとしていれば、方法は自ずと見つかる。

### 3. 感想・今後の展望

研究会で、またその後の懇親会において参加の方々より貴重なご意見を頂けたことに心より感謝している。この場を借りてお礼を申し上げたい。

今後の展望だが、7月初旬にインタビューデータを取る前に分析焦点者についてどの部分の意識変化を明らかにしたいのか、再度自分のなかで確認し、整理しておきたい。そして、データ収集後に失速してしまわないよう、「年内の研究発表」を目指したい。この研究会では、忙しい現場を抱えながらデータ収集をし、分析をしている人たちが多く、研究活動への動機付けをたくさん与えられている。この点でも研究会に入会して良かったと感じている。

研究会において水戸会長より、基本になる本（木下先生の『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生』、『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』）は何度も熟読してから研究会に参加することで、当日の議論も活発になることを期待している旨のお話があったが、他の人の発表やそれに対するフィードバックから学ばせてもらうという依存的な気持ちだけで参加しようとしていた自分を反省した。

また、今回の研究会では研究発表の途中で、概念生成をみんなで実際にやってみるという場面があった。その作業を通して自分のなりに感覚的に「概念生成」という作業が少し理解できたような気がして、大変参考になった。先述のことと少し矛盾するようだが、毎回の研究会で基本的な作業を実際にやってみて学べる機会があると嬉しい。

### 【構想発表 2】

中学校教師の生徒との人間関係における悩みと、その後の変容に関する研究

筑波大学大学院人間総合科学研究科 都丸けい子

#### I. 本題

##### 1. 研究テーマ

教師のストレス・バーンアウトについて、その予防・軽減を目的に、関連する要因の検討がなされてきた。一方、教師の成長・ライフコースに関する研究では、ストレス・バーンアウトに関連する要因が同時に、その悩みを契機とした成長要因としても指摘されている。いずれの研究においても、個々の要因の検討にとどまり、メンタルヘルスの悪化と同時にそのことを契機とした肯定的な変容という両方の可能性を含むそれらの要因が、教師に与える影響のプロセスを検討したものは、ほとんど報告されていない。

そこで本研究では、悩むことの積極的な意義を明らかにするために、悩みを抱くプロ

セス、及びその悩みを契機とし肯定的な変容が生じるプロセスを明らかにする。なお、生徒に与える影響を鑑み、本研究では悩みを生徒との人間関係における悩みに特定した。

## 2. 現象特性

教師は入職後、すぐに教師として日々を過ごす。その中で、生徒との関わりは、教職生活の中で最も中心的で基礎的なものである。中学校教師は、最も関係をとりにくい思春期段階の生徒と関わり、生徒との関わりについて様々な困難や悩みを抱える。その困難や悩みを乗り越え、教師としてベテランになっていく。

## 3. M-GTA に適した研究であるかどうか

ヒューマンケア従事者に焦点を当てた研究であり、中学校という特定環境の中で思春期前期の生徒との相互作用によって生じる悩みと、その経験後に教師に生じた変容についてのプロセスを説明しようとした研究であることから、M-GTA が本研究の手法として適していると考ええる。本研究の知見は、悩みを抱えている（抱く）教師に対して、その悩みを成長へとつなげる過程を提示できる可能性を孕み、実践（悩む教師、悩む教師の周囲の人々、学校関係者）への還元ができると考える。

## 4. 分析テーマへの絞込み

「中学校教師が生徒との人間関係で悩みを経験することは、教師の成長という視点からいかなる意義があるのか」を検討するため、教師の行動と認識に焦点をあてて、悩むプロセス及び、その経験を教師が意味づけていくプロセスについて検討する。

## 5. データの収集法と範囲

ラポール形成のしやすさを考慮し、筆者の個人的な知り合いである教育関係者や、心の相談員を通じて、「教職生活を振り返って、生徒との関わりで大変だったことや悩んだことについて、自分自身の気持ちも含めて詳しく語ってくれる人」という条件で対象者を募った。それらの教師に調査者自身が直接会って、研究の趣旨や倫理的配慮に関して説明した。これを理解したうえで調査への協力を承諾した中学校教師 11 名を対象とした (Table1)。ただし、調査対象地域の特質上、異なる学校段階（小学校）経験者もいた。それらの教師に対しては、スムーズな回想を促すため、入職から現在にいたる過程をすべてたずねたが、データの分析に際しては中学校勤務時のものを用いた。テープ録音の許可を得、一人あたり、2 時間の回想法による半構造化面接を行なった。分析に際しては、面接の逐語録を作成し用いた。分析の対象とした悩みのケース数は 54 ケースである。

## 6. 分析焦点者の設定

公立中学校に勤務経験のある教師で、生徒との人間関係で困難や悩みを抱いた経験の

ある者。また、その経験を機に離職していない者。回想法を用いたため、勤務経験は問わなかった。

## II. 質問及び検討事項

- ・「生徒との人間関係における悩み」という語がわかりにくい。特に、「人間関係」という言葉を用いて研究者が意図するものが何なのか？
- ・博士論文のテーマとしては、インパクトに欠ける。はたしてこれで、どのような問題に取り組もうとしているのか？先行研究を緻密に検討し、テーマを検討すべきである。  
→「生徒との人間関係」という語については、中学校生活の中ならば特に場面や内容を特定せずに「中学校教師と生徒との関わり」について知りたかった意図があったために用いた。しかし、「人間関係」や「悩み」、「成長」など、研究で用いる用語について詳細な検討を行う必要がある。先行研究を再検討したほうがよい。
- ・「生徒との人間関係における悩み」については、もうすでに数量的な調査を用いて検討がなされているのではないか？このテーマで M-GTA を用いる意義は何なのか？  
→先行研究ではストレスという観点から数量的手法を用いて、関連する要因の検討が多くなされてきた。しかし、それらの要因の教師への影響のプロセスについての検討は、先行研究においてはその重要性が指摘されていながら、なされてこなかった。本研究では悩み事象そのものについて明らかにすることが目的ではなく、悩みを抱く過程で教師に生じる認知・行動上の変化に焦点をあてることを目的としている。さらに、本研究において悩みを契機に肯定的な変容が生じるプロセスを示すことで、「ストレス（悩み）＝メンタルヘルスの悪化」とは異なる前提で、悩む教師への支援を構築できるのではないかと考える。
- ・悩み事象のカウントの仕方は？  
→教師が悩み事象として語った、特定の生徒に関する一連の出来事を1つとカウントしました。特定の生徒は1名のときもあれば、数名、もしくはその学校の生徒全体というように幅がありました。
- ・最近抱いた悩みと、20年前に抱いた悩みを一緒に検討していいのか？また、役職についても同様である。  
→本研究では、中学校教師が生徒と関わる際に抱く悩みのプロセスの共通するものを検討することが目的である。よって、この点に関しては、分析対象者がきちんとしていれば、また深い解釈がなされていけばよいのではないかと考える。

## III. 発表後の感想

今回、このような貴重な発表の機会をいただき、非常にありがたかったと感じております。テーマ（先行研究や用語の整理を含む）にしても、M-GTA の手法にしても、まだまだ勉強不足な点が多いことを痛感いたしました。参加された皆様から貴重なご意見

をいただき、次回にいかすべく、反省し取り組んで生きたいと思います。本当にありがとうございました。

現在、データの収集は済んでいる状況です。博士論文としてきちんと組織立ててまとめていくプレッシャーもある一方で、早く対象者の先生方に、また中学校の先生方に結果をお返し、教育現場に還元したい気持ちで研究をしています。また近いうちに、研究報告として再度発表させていただきたいと思っております。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

.....

#### 【次回の研究会】

日時： 第 32 回 2005 年 7 月 30 日（土） 午後（13:30-18:00 を予定）

場所： 立教大学（池袋キャンパス）10 号館 2 階、x203 教室

#### 【編集後記】

- ・ 第 9 号のニューズレターをお届けします。発表者の皆さんの原稿をそのまま掲載しています。ご協力、ありがとうございました。
- ・ 今回は 50 名の参加者があり、記録を更新しました。会員数も 100 名の大台にのっています。また、総会の記録にありますように、西日本 M-GTA 研究会がスタートしました。会長と事務局も変わります。セカンドステージに向けて、より充実した内容の研究会にしていきたいと思います。

（木下記）